源流の四季

第15号（2004年10月）秋
Autumn

発　行　所／多摩川源流研究所　〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428[87]7055　FAX 0428[87]7057
発行責任者／中村文明
協　　力／多摩川源流協議会（塩山市・奥多摩町・丹波山村・小菅村）
多摩川源流観察会
印　　刷／（株）サンニチ印刷
http://www.tamagawagenryu.net
E-mail:genryu@mxa.cosmo.ne.jp

奥多摩町の巨樹（金袋山のミズナラ　撮影：中村文明）

Contents 目次

紀ノ川・吉野川源流を歩く……2〜3
源流体験特集……4〜6
多摩川流域ネットワーク設立総会……7
森林再生プロジェクト事業……8
多摩川源流自然再生協議会……9
吉野川源流資源調査……10
源流再生・全国源流一斉調査……11
多摩川流域セミナー・源流フォーラムの案内……12

紀ノ川・吉野川源流を歩く

吉野川源流資源調査（日本財団助成事業）に終わりがあるのだろうかと不安になることがある。大台ヶ原を源頭に抱く吉野川源流域は本沢川、三之公川、北股川の三川の個性的な流れに彩られており、踏み入れば踏み入るほどその魔力に取り憑かれてしまう。その天与の自然の奥深さは計り知れない。（写真　中村文明）

本沢川支流の白倉又沢（深き水）

苔むした本沢川の本流

清冽な流れに心洗われる

悠久の時の流れに心洗われ

本沢川と白倉又沢の出会い付近

春に芽生え
秋に散る
命の輪廻

秋の彩り

谷のいたる所に巨大な氷柱が顔をのぞかせる（吉野川源流域）

特集 源流体験教室

日本の自然の美しさに感動

小菅村と多摩川源流研究所は田舎を持たない都市に生まれ育った子どもが本物の自然を体験し、自然と向きあう中で自立心と意欲を育てる事を目的とした源流体験教室を実施している。今年は公立小学校三校を含む、多摩川流域内外の多くの団体が源流体験教室に参加した。その模様をお伝えし、源流体験教室の魅力に迫ってみる。

広がりを見せる源流体験教室

源流体験教室は多摩川の源流である小菅川を舞台に谷間の川を上流へと歩いていくもの。先導する現地スタッフがその途中に川の自然環境などについて解説を行う。体験のクライマックスはなんといっても最後の飛び込み。冷たい水が流れる瞳淵に飛び込こむ一瞬は、まさに源流を体験できる一瞬である。

今年度は墨田児童館、川崎水辺の楽校、狛江市岩戸児童センター、三鷹市社会教育課、とどろき水辺の楽校、こまえ水辺の楽校、山梨県立ろう学校、中野区子ども家庭部、調布市児童館サマーキャンプ、瑞穂町教育委員会、せたがやアドベンチャークラブ、稲城市向陽台育成会、稲城第六小学校、中野養護学校、大田区矢口小学校、ボーイスカウト昭島、世田谷区城山小学校などが源流体験に訪れた。

上流を目指して（小菅川）

中野区の小学生が源流へ

八月九日～十日に中野区子ども家庭部が源流体験に訪れた。源流体験に参加した子どもは中野区内に住む小学生二十五名。準備体操をして林道から小菅川に降りてゆくと「涼しい」とつぶやき、川にはいると水の冷たさに悲鳴を上げながらもしっかりと歩き始めた。釜淵のドキドキコースでは落ちた時の心配をしている子もいたが挑戦した全員が見事自分の力で渡りきり、瞳淵へ進んでいった。子ども達の一番の楽しみ、瞳淵の飛び込み。予想以上の水の冷たさと深さに歓声を上げながら何回も飛び込んでいた。

源流体験へ出発

つくり出す喜びを知る

源流体験の夜は本当の夜を体験するナイトウォークとキャンプファイヤーを予定していたが、夕立がひどかったため中止となってしまった。子ども達はナイトプログラムが中止になったことを残念がっていたが、かわりにスタッフが用意したたき火を囲みながら様々な話をしていた。

十日には小菅村のゆうゆうクラブに指導をお願いし、竹とんぼを製作した。小刀を使って竹を削り、バランスを調整しながら羽を作っていく。完成した竹とんぼを飛ばしてみると勢いよく飛んでいく物もあれば、あらぬ方向に飛んでいく物など様々だったが、子ども達は物を作る喜びを体験していた。その後、昼食のおかずとなるマスつかみ取りを行った。つかみ取りを行う場所は非常に浅い場所であったが、マスの素早い動きに翻弄されなかなか捕まえることができなかった。捕まえたマスはスタッフがワタを抜いて塩焼きにし、無事おかずとすることができた。子ども達は物を買うのではなく、自分でつくり出す体験を楽しんだ。

釜淵にて（小菅川上流）

大人も源流を満喫
―稲城市稲城六小

八月二十日に稲城第六小学校の稲六ダディーズという父母と先生の団体が源流体験教室を行った。源流体験には大人と子ども各二十二人で参加した。参加した子どもの中には飛び込みの最高記録に挑戦と言って十五回飛び込んだ女の子もいた。飛び込みでは大人も子どもと一緒に

なって楽しみながら、源流の流れの強さや冷たさを五感で感じることができたようだ。源流体験のあとも小菅村でキャンプを行い、釣りを楽しみ、夏の源流を満喫していた。

自然が大好き
―大田区矢口小

八月二十四日には矢口小学校が源流体験を行い、大人七名に子ども十八名が参加した。源流体験前日は冷え込んだ一日で、水温が十四℃程度であったが、キャンプ場の脇を流れる川で水遊びをするほど自然大好き。

体験当日は大人も子どもと一緒に源流の自然についての説明に耳を傾けていた。箱めがねを使って川の中をのぞき、小さいヤマメが横切ると「いた！」と歓声が上がった。参加した子どもは源流体験を通して自然の大切さや不思議さを知ったようだ。

源流ならではの体験
―世田谷区城山小学校

八月二十八日には城山小学校が今年最後の源流体験教室を開催した。当日は曇り空で温度も低く、川の中に第一歩を踏み出した時は「冷たい」と言っていた子ども達であったが、源流を歩くうちにその温度になれてきたのか「絶対に飛び込む」と宣言する元気さを見せた。次の日に行ったマスのつかみ取りではマスの素早さに驚き、また火を使って料理することの大変さを体験した。

マスつかみ取り（小菅村、鶴川）

子供と一緒に楽しむ

これらの三つの学校とも参加した先生や父母は自然が大好きで子どもと一緒になって楽しんでいたことが印象的だった。また、子どもにとって野外で必要なテクニックを子どもに教える大人の姿はとてもカッコよく映っていたようだ。

源流体験教室のアンケートから

自然とのふれあいを実感

「自然とのふれあい」と日常では簡単に口にしてしまいますが、今日、あらためて実感できたことはうれしかったです。また、要所での解説はとても良い学習になりました。

子供が頼もしく見えた

自然の中を自分の力で歩く体験は、自分で考え自分で行動する事に直結しています。体験の中で子どもたちが成長していく様子がとても頼もしく思えました。

我子のたくましさを実感

沢登りという自分にとっても初めての体験を通してたくさんの自然に触れることが出来た。我が子がずいぶんたくましくなったとあらためて実感できた。

自然の姿に驚いた（子供）

源流体験のときに見た、木にコケが生えていたり、倒れたりしていた。自然のすごさに驚いた。周りの景色がきれいで疲れるのを忘れてしまった。僕は前からこのような場所に来てみたいと思っていたので良い体験だった。

深く心に刻み込まれた

自然の力と子どもたちの生きる力をリンクさせてのお話が、子どもたちにとっても、大人にとっても深く心に刻み込まれました。実際に自然の驚異を目にし、体験したことでいつまでも心に残ると思います。

水の力を実感

川幅があんなに狭いのに、深いところでは二メートルもあるなど、水の力のすごさを実感できました。また、落葉による腐葉土のフカフカした土にびっくりしました。

甘い水がおいしい（子供）

すごく水がきれいで冷たくて気持ちよかった。途中で飲んだ湧き水が甘くておいしかった。

自然は残っている

まだまだ、東京からわずかなところに自然は残っている。捨てたものではない。この自然をこれからどう残し続けるか、大人が真剣に考えなくてはならないと思いました。子どもたちが真剣に取り組んでいた姿が印象的でした。

急流を渡る（小菅川上流）

子供の目の輝きが印象的

興味がある、おもしろいと感じた時の子どもたちの困難に対する姿勢とたくましさが印象的でした。説明を集中して聞いているときのキラキラしている子どもたちの目を見ることができてとてもうれしかったです。

源流体験教室に新しい力 ——学生ボランティアの活躍

毎年、小菅村と多摩川源流研究所は源流体験教室を行っているが、今年はこの事業をサポートする学生ボランティア制度を開始した。この制度は本当の上下流交流を目指し、京浜河川事務所からの協力を受け実現した。流域の大学に通う学生を対象に募集した結果、自然や環境教育に興味を持つ学生達が集まった。

今年は東京農業大学などの学生七人が源流体験をサポートするために奮闘した。大学生の目から見た源流体験教室ということで、彼らのレポートの一部を紹介する。

子どもから学んだ

東京農業大学森林総合科学科
三年 松田宗大

子供はすごく敏感だと思った。私は最初にどう接したらよいかわからなくて他人行儀に接していた。すると誰も寄ってこないし、自分も気持ち悪かった。そこで周りの人達を見てみると同じ目線で会話していることに気が付いた。そこで、そのことを意識して話をすると何人かの子供達と仲良くなれた。こちらがあるがままの自分を出すことによって子供達は集まってくることがわかった。人付き合いとは、年齢関係なくそうだと気づかされた。源流体験を通して、子供達から忘れかけていた物を再度学ぶことができた。

体験することが重要

東京農業大学森林総合科学科
三年 原田茜

川の中を歩いて渡るのは、今回が初めての経験でした。胴長をつけていたのであまり水の冷たさは感じませんでしたが、水の流れの速さや水圧は体で感じることができました。蛇口をひねれば出る何気なく使っている水が何処から来るのかということと、水を守るために働いている人がいることを源流体験のボランティアを通して意識するきっかけになりました。コケの話が印象に残りました。コケは土石流を嫌い、豊かな森があることを表す指標になっている事を聞き、勉強になりました。源流を歩いて、いい空気を吸い、水のきれいさ、森の豊かさを体験し、この景色をもう一度見たい、来たいと思いました。この思いが、源流の豊かな自然を守ろうという思いに繋がると思います。そのためにも、水の発祥しているこの源流をより多くの人に知ってもらい、また体で体験してもらうことは、重要な事だと思います。

また、授業で良く聞く渓畔林を実際に目にして、緑のきれいさを感じました。聞くだけじゃなくて、実際に見ることで授業の内容もイメージも出来、興味がわきました。

のぞき淵にて

今年の源流体験を終えて

多摩川源流研究所
研究員 中川徹

今年度から多摩川源流研究所に勤務することとなったため、源流体験教室に取り組むのは初めての経験であったので、中村所長について源流体験の下見に同行した。下見が終わった後の感想はこの取り組みは本当に子供のためを思って実施されているということであった。源流体験教室のコース途中で行われる自然解説、淵を越えるやり方や瞳淵での飛び込みなど本当に源流が好きな人間がそのことを伝えるために考え出したものだと伝わってきた。

私は源流研究所に勤務する以前に、二年間中学校の「総合的な学習の時間」で行う森林についての学習プログラムの作成や指導に関わってきた。その中で間伐体験などを行う時にただ体験をするのではなく、その体験が子供の自信につながるように努力はしてきたつもりであったが、源流体験に同行して負けていると感じた。私が行ってきた活動は学校の中の一単元であり活動場所や活動形態などの条件がまったく違うため比較はできるものではないだろうが、そこにかける情熱と経験において差を感じずにはおれなかった。

七月も後半となり源流体験の本番が始まった。スタッフの一員として解説などを行うようになった。下見の時に感じた想いから、その時にはただ解説を行うのではなく、自分なりに子どもたちに伝えたいことを前面に押し出した。年齢によっては難しい内容もあるが、多摩川源流の小菅村には森が好きで川が好きな人がいるということを多少なりとも伝えられるように努力をした。

私は子供が本気で遊ぶことが体験学習につながると考えている。源流域を訪れた子どもたちが川や森にある自然と本気になって遊べるよう経験を積んでゆきたいと思う。

多摩川流域ネットワークを設立

「多摩川に学び源流から河口まで『多摩川が大好き』という一点で結束し、多摩川を愛する人々の大河の流れを築きたい」と、山・川・海の命のつながりを求めて、六月二十八日、川崎市多摩区のせせらぎ館で多摩川流域ネットワークが設立された。

同ネットワーク（略称TBネット）は、様々な障害を乗り越えて多摩川の未来に向かって、流域間の協調と友好と信頼の絆を深めていくことにしている。

源流から河口まで市民の心一つに

全流域を網羅する組織はTBネットが初めて

せせらぎ館で開催された設立総会には、多摩川に関心を寄せる山梨、東京、神奈川の市民三十六名が参加した。多摩川では非常に多くの市民団体が活動しているが、源流から河口までの全流域に関わる市民が一堂に連携する組織はTBネットが初めてである。

多摩川流域ネットワーク設立総会（6月28日）

多摩川では、市民と行政のパートナーシップによる良い川づくりを育むための仕組みとして平成十年十二月十九日に多摩川流域懇談会が設立され、全国に先駆けて河川整備計画が確定されるなど、活発な市民活動が展開されてきた歴史と伝統がある。しかし、全流域の市民が連携する組織がなかったために、今回のTBネットの設立の運びとなった。

総会では、総会準備委員の石田幸彦さんが、TBネット結成に至る経過を報告、NPO法人「多摩川エコミュージアム」の代表理事を務める長島保さんを議長に選んだ後、会則を審議し決定した。

楽しく活動するために個人参加方式に

会則では、「この会は、流域の源流から河口までの多摩川に関心のある団体・個人の連携を図り、ネットワークを構築し、ゆるやかな合意形成を目指しながら、広範な人々が主体となって多摩川の良好な将来に資するための意見提案と活動を行うことを目的とする」と定め、多摩川流域の環境保全や交流活動に積極的に取り組むことになった。

TBネットへの参加者は、市民団体のリーダーが殆どであるが、団体を背負わずに楽しく交流、勉強、意見や情報を交換することをモットーとするため個人参加を基本とする。

TBネットは、(1)流域で活動する団体・個人を対象にした意見交換、勉強会、セミナーなどの開催、(2)パートナーシップに基づく行政・企業との交流、諸機関への積極的な参加、などを活動の柱にすることを確認し具体化を図ることになった。

総会では、世話役として運営委員十一名を選出した。その場で開催された運営委員会で長島保さんを代表に、中村文明さんと倉持武彦さん（多摩川センター理事）を副代表に、鈴木真智子さん（とどろき水辺の楽校代表）を事務局担当に選んだ。

総会で選ばれた運営委員は次の通り。（敬称略）

長島保（学び）、中村文明（源流）、倉持武彦（支流）、鈴木真知子（下流）、西山嘉文（上流）、竹本久志（中流）、安元順（海）、石田幸彦（支流）、長谷川博之（生態系）、井田安弘（まちづくり）、遠藤保男（水・水質）

多摩川流域懇談会運営委員会を開催

市民と行政のパートナーシップによるいい川づくりのゆるやかな合意形成を目指す市民・行政の協働組織である多摩川流域懇談会が、八月二十七日、川崎市多摩区の二ヶ領せせらぎ館で開催された。当日の懇談会では、(1)運営委員会の組織の決定について、(2)多摩川流域懇談会運営委員会規約（案）について、(3)今後の活動スケジュールについて、それぞれ審議され、多摩川流域ネットワークを市民部会委員として確認した。

意見交換では、行政側の委員から、「市民の代表として多摩川流域ネットワークは相応しいのか」との質問が出され、その疑問に対して長島保代表が「多摩川流域ネットワークは多摩川の広範な団体・個人に呼びかけて組織が結成されたこと、市民フォーラムを発展的に解消し、その継承者である」と説明し、了解された。

多摩川流域懇談会は、多摩川セミナーを十二月に開催するなど今後の活動計画を確認、流域の市民に広く参加を呼びかけることにしている。

運営委員会の役員について、委員長に多摩川流域ネットワークの代表の長島保さん、副委員長に京浜河川事務所の山口調整官を選び、運営委員会と流域懇談会の事務局は、NPO法人多摩川エコミュージアムに置くことになった。

「森林再生プロジェクト」事業に新たな展開

事業開始から一年が経過し、好評な「森林再生プロジェクト」事業（日本財団助成事業）であるが、平成十六年六月十九日～二十日に行われた今年度二回目の同事業では、多摩川流域から四十六名が緑のボランティアとして参加し広葉樹林の除間伐を行った。また、同年七月三日～四日に行われた第三回目には三十六名が参加し、下草刈りを行った。同事業でこれらの作業を行うのは初めての試みである。

人工林の間伐ができない

管理不十分な人工林（針葉樹林）の荒廃を食い止めるために始まった本事業であるが、夏は樹木内で水分移動が活発であるため伐倒木が立木に当たるとその傷から病気になり易く材価に大きな影響を与えるため、間伐は行わない。そのため、広葉樹林の除間伐と植樹を育成するための下草刈りを実施した。

広葉樹の伐木（鹿倉山）

木漏れ日のすがすがしい森へ

第二回の施業方針は優先樹種であるミズナラの発育と種子更新を考慮し森林内の照度を上げるために、劣勢木などを伐木することである。

今回は針葉樹林と異なり様々な樹種や樹形の木を切った。このことが参加者にとって新鮮な体験であったようだ。また、小径木をたくさん切る必要があるため参加者一人一人が目的に合うためにはどの木をどうやって倒すかを考えなければならないので、その体験が森の再生を行っているという充実感に結びついた。作業を進めるに従って増えてくる木漏れ日がすがすがしかった。

炎天下のきつい作業

第三回では林業作業の中で一番辛いと言われている下草刈りを行った。下草刈りとは植栽した苗木の生育を妨げる雑草木を刈り払う作業のことで、雑草木が生育する夏の作業である。

今回は初日に桜の植栽地、二日目にヒノキの植栽地の下草刈りを行った。両日共に晴天であったため、炎天下での作業となった。参加者のほとんどが下草刈りに使われる大鎌を使うのは初めての経験。指導員からは安全面を考慮し、下から上へ刈り進んでいくよう指導を受け、慣れない斜面の作業に奮闘した。

鎌は使っている内に切れ味が落ちてくるので適時研ぐ必要がある。休憩時間には大鎌を研ぐ指導員の周りに参加者が集まり、大鎌の研ぎ方を見つめていた。

緑のボランティア隊（大たば峠）

作業を疲れず安全に行うために道具の手入れは欠かせないということを実感した。

作業の内容、辛さ、楽しさ、どれをとっても初めてづくしの第二・三回「森林再生プロジェクト」事業であったが、森林再生とは森づくりであるとあらためて実感し、森林を育てるためには様々な作業が必要であることを参加者が体感することができた。

参加者のアンケートを紹介します。

◎木の個性を感じた

今月は広葉樹の間伐ということで、前月とは違った気持ちで木を伐りました。それは針葉樹とは異なり、一本一本の木にそれぞれ個性を感じ、この木の将来を考えながらの作業となり、それこそ、木と対話しながら作業できました。

◎雑木林に感動

広葉樹の間伐は今までの人工林の時とは違って、とても難しかったです。でも、新しいことを勉強できて非常にうれしかったです。雑木林の光景に感動しました。また機会があれば広葉樹もやってみたいです。

◎暑かったが良い経験

今までの森林再生は間伐作業のみでしたが、今回下草刈り作業を経験し、木を育てる多くの作業の内の一部であることを身をもって知ることができた。鎌を使うのは難しいが、時間と共に慣れてきて使えるようになった。暑い夏の中だったが、良い経験ができた。

第二回多摩川源流自然再生協議会を開催

平成十六年六月三十日に小菅村役場において第二回多摩川源流自然再生協議会が開催された。宮林茂幸会長をはじめとし委員二十五名、小菅村からは廣瀬文夫村長など九名が出席し計三十四名が参加した。自然再生協議会とは自然再生法に基づき失われた自然をよりよい形で取り戻すことを目的に設置される

未来の自然のために

小菅村廣瀬村長は挨拶の中で「これから村が取り組んでいく『自然再生事業』や『地域施策創発調査事業』等におきまして基本計画策定の指針となるようなご意見を出して頂きたいと思っております。」と述べた。今回の自然再生協議会では村外の委員に源流の村を知ってもらうための視察と研究討議が行われた。研究討議に先立って行われた視察では、小菅村の環境に配慮した取り組みや人工林や村内の自然を見学した。

多摩川自然再生協議の様子

続いて行われた研究討議では宮林茂幸会長から「私たちが現状を把握し、従来どのように自然を利用していたのか、どういった形で未来に残していくかを考慮し、再生を考えていくとよい。」と意見が出された。

その後「自然再生事業の全国的な動向について」というテーマで、環境省自然環境局の佐藤課長補佐は自然再生推進法の解説と地域の動きについて、実際に協議会を設置した地域の動向などをふまえ報告し、林野庁の河野森林計画官は森林分野の動向について大阪府岸和田市の里山保全の例を挙げ報告した。京浜河川事務所の山口技官は「長田地区で行われている多摩川の礫河原再生事業などとともに、上下流連携をキーワードに源流域の持つ価値を発信するための調査を今年度出来ればと思います」と多摩川の自然再生の取り組みを紹介した。

自然再生へ新たな展開

引き続いて、中村源流研究所長が地域施策創発調査と自然再生事業について報告し、「国が行う地域施策創発調査に『源流再生・流域単位の国土保全と管理に関する調査』を申請した。全国で同じような問題を抱える源流部のモデル事業となる仕組みづくりや組織づくりを行う調査事業を行いたい。源流らしい村づくりのために自然再生協議会とも連携したい」と述べた。

報告に引き続いて行われた意見交換では、「子供達にこの自然を体感させることが大事。事業目的のゾーニングと体験用のゾーニングをするべき」、「自然再生と併せて林業のモデルを作っていきたい」など意欲的な意見が発表された。

最後に次回以降の多摩川源流自然再生協議会ではテーマごとに部会を設け、議論と各委員の協調を深めていくことが確認された。

源流・古道水源林の旅を実施

八月六日～八日に源流・古道水源林の旅を実施し、二十五名の参加者は柳沢峠から将監峠までを走破した。

源流・古道水源林の旅は松姫峠から雲取山へ至る多摩川源流域の稜線を三年かけて一周するというもの。今年は昨年、台風によって中止となってしまった柳沢峠から将監峠までのBコースを改めて実施した。

今回のBコースには指導者として西多摩自然フォーラムの荒井洋一氏が参加された。荒井氏は植物に造詣が深く、コース途中にある植物の解説を行った。

出発時の環境から、熱射病などを防ぐため柳沢峠から板橋峠までの区間をショートカットし板橋峠から出発した。出発当初は好天に恵まれていたが、白沢峠をすぎた頃から黒い雲が空を覆い始め、昼食後には雷雨となった。参加者は登山道が川のようになる豪雨の中を歩き続け、三時間後、雨が小降りになる頃に宿泊地の笠取小屋へ到着した。

一夜明けて、豪雨をもたらせた雲は消え去り、参加者は将監峠に向けて出発した。途中、水干では最初の一滴に巡り会い、参加者は多摩川の恵みを味わうことができた。

今年のBコースは炎天下や雷雨など厳しい状況もあったが、下山後に参加者全員から笑顔がこぼれていた。

思い出多い源流古道の旅（将監峠・8月8日）

吉野川源流資源調査に参加して（奈良県川上村）

全国源流ネットワークは吉野川源流資源調査（日本財団助成事業）に取り組んでいるが、平成16年1月24日～26日に実施した源流資源調査に参加した東京農業大学の菅原泉助教授の調査報告書を前号に続いて紹介する。

東京農業大学造林学研究室助教授　菅原　泉

(4)堂々としたトガサワラの雄姿

トガサワラは、1893年（明治26年）7月に、紀州尾鷲町から大和国川上村大滝に至る途中で土井八郎衛門氏所有の林内で、白沢林学博士が初めて発見したことで知られている。この白沢博士は、小菅村の水源地に見られるジゾウカンバを奇しくも、トガワサワラを発見した同年の明治26年10月17日に秩父三峰山中の桂平の国有林内で発見し命名している。限られた一部の地域にしか分布が見られないそれぞれの希少樹種が、小菅村と川上村の水源地に存在することもなにかの縁を感じる。今回、トガサワラの生育地を一目見ようと、栃谷から雪道の北股川沿いを走り、原生林の入り口まできたが雪のためそれ以上は進めなかった。しかし、入り口といっても堂々としたトガサワラの雄姿を所々に見ることができたのは幸運であった。トガサワラの名称は、三重県北牟婁郡における通名であるが、中国では仮鉄杉、偽鉄杉と総称して学名の意を伝えている。本属は7種あり外国には6種を産し、アメリカのダグラスモミが有名である。このダグラスモミは、ペリー提督が下田に来航したおり、長坂材（長さ8m、幅20cm、厚さ4cm）を江戸幕府に贈ったことが記されている。これが輸入木材の最初ではないだろうか。

日本産について熊野物産初誌では、「マトガと云い、一名を皮木と称する。モミに似てその葉はまばらである。材質はトガに似て木理は粗く微紅を帯びて脆い。水に堪える」とあり、桶などに用いられたようである。

分布域は、紀伊半島の三重、奈良、和歌山県の一部と高知県東部の一部に限られ、純林、混交林を成しているが、三之公川渓谷には密生の原生林があり昭和4年12月に天然記念物に指定された。北股川から三之公川に分かれる崖に、カクシ平（行宮跡）に通じる古道を見ることができる。そこには、南朝方が追っ手から逃れるために幾つかの難所を懸命に分け入り、南朝の血筋を絶やすまいとする気迫が感じられた。

歴史の証人（吉野杉のシンボル）を訪ねて

(5)吉野林業の歴史に触れて

さて、吉野林業地は名だたる林業地においても筆頭格であるが、高密度の植栽本数に至った経緯については、樽丸生産や17世紀後半の住宅建築様式の転換（書院造→数奇屋風書院造）によるものといわれているが、若干違った説を紹介する。

吉野の村民が山焼きを行い、山作や木場作によって衣料（コウゾ、クワ、アサ）、食料（アワ、ヒエ、マメ、ソバ）などを自給していたとき、それらの焼畑跡地に一斉植栽したことが蜜植につながったというものである。一般に、吉野では天然林を開いて山作を行い、スギを植えれば植栽木は自己所有になったので、次々と山を開き耕作地にし、その跡地にスギを植えた。植栽木は、幼齢時に村外の資本家と年季の限った契約（立木年季売買）を結び、山元村民は山守として売却するまで管理を行っていた。この場合、植栽本数が多いほど収入が増えるので、益々密植が盛んになったと考えることもできる。

つまり、吉野林業の高密度な植栽本数は、樽丸生産などを目的としたのではなく、結果として樽丸生産や当時の建築材需要に適していたことになるのである。以上の説は、元農大教授の倉田益次郎先生の「植付本数論」で述べている。今回は、そこから一部引用したが、まさに慧眼である。

現地では、源流館の皆様と辻谷館長、役場の泉谷さんにお世話になりました。ここに厚く御礼申し上げます。

見事な吉野杉を視察する

源流再生・全国源流一斉調査を実施

(1) 省庁連携による国土創発調査のねらい

今回の「源流再生・流域単位の国土の管理と保全に関する調査」（国土創発調査）は、小菅村の発議を受けて、環境省、国土交通省、林野庁、文化庁など国の省庁連携による国家的な国土再生計画づくりの一環であり、国が源流再生事業に本格的に着目した画期的な取り組みである。そのため、「源流再生百年の計」の視点に立って、今後の源流再生に本当に役立つ科学的なデータを蓄積する。

① 全国的な国土をめぐる現状と課題

□近年における無原則的な国土利用
□管理の行き届いていない国土面積の増加
□自然との調和を無視した開発
□国土資源管理の担い手の不足

② 流域圏に着目した国土の管理と保全

□流域圏単位の総合的な計画の必要性
——森林、農地、河川の整備計画
□横断的な組織の検討と市民団体（NPO）等との連携
——参加、協働、合意、交流
□上下流連携による水源地域の管理
——産業・文化の振興、ボランティア

吉野杉の調査風景

③ 今回の国土創発調査の目的

「元気な源流再生・復興をめざす調査」には、大きく分けて3つの目的がある。

第1は全国の源流域を対象に流域圏的アプローチを活用しつつ、源流が今後生きていくための源流域の再生モデルを小菅村に構築する。

——「小菅モデル」の提言

第2はこのモデル構築と合わせて、同様な課題を持っている全国の源流域と連携し、その再生を支援するための行政組織「源流再生の郷協議会」を組織するとともに、全国の源流域から類型化されたモデルを選定し、「源流ライフ」を提言する。

——「源流ライフ」の提言

第3は、「源流ライフ」をすすめるためのシンクタンクとして、全国源流ネットワークや関係する学識者と合わせて、新たに源流学会を組織し、源流文化論や「源流学」を探求し、全国的な展開を図る。

——「源流応援団」の形成

この調査によって、源流の持つ様々な価値（宝物）を発掘し、これをもとに、源流の生活を残しながら、自然、文化を維持し、源流が生きていくためのモデルを構築し、このモデルをもとに全国の源流域が連携し活性化を図るとともに、これらを支援する組織、仕組み作りを行うことが大きな目的になっている。

同時にこの取り組みを中途半端な事業として終わらせないため、本事業の継続と更なる発展を視野に入れて取り組むことが重要である。

(2) 「元気な源流再生・復興をめざす調査」の内容と具体化

こうした課題を達成するための「全国源流一斉調査」を実施する。全国源流一斉調査の内容は次の通り。

1つは、源流域の国土の保全と管理に関する調査（森林再生、自然再生、流域圏等のプロジェクトの実施）

——源流域における自然的資源の現状を明らかにする

2つは、源流の持つ様々な文化的・資源的な価値の再発掘と活用方策の検討（森林、木材、文化、景観、観光、自然、生活等）

——源流域における社会的資源の現状と組織等の課題を明らかにする

3つは、源流を対象にした流域圏アプローチの構築

——全国の事例を類型化する

4つは、源流域を持つ地方自治体の連携体制の構築（源流の郷協議会）

——「源流ライフ」のすすめと普及

5つは、源流の郷協議会、全国源流ネットワーク、学識者などを取りまとめ、新たに源流学会を設立（官、民、学のトライアングルによる源流再生）

——源流に関する調査研究機関のネットワークづくり

この「全国源流一斉調査」を実施すると共に、全国各地の源流域の町や村及びそれぞれの流域の市民団体との連携と交流を図る目的で「全国源流の郷協議会準備会」が、十月一日、東京で開催予定である。

源流再生に向け多摩川流域セミナー開催

多摩川流域セミナー開催の趣旨

現在、全国各地の源流域は過疎化と高齢化の荒波にさらされ、林業など基幹産業の衰退と相まって基礎的自治体の存立さえ危ぶまれるなど様々な課題を抱えている。源流域の抱える課題を解決するには、源流に暮らす人々と源流の恩恵を受けている人々が協力・協働し、パートナーシップを確立して、上下流連携を図りながら流域単位で流域の資源を守る取り組みを強めることが求められている。環境省、国土交通省、林野庁などの省庁連携による「源流再生・流域単位の国土の管理と保全」（国土施策創発調査）に関する全国源流一斉調査がこの秋に開始されるなど、源流へ新しい光が注がれている。全国各地の源流の仲間の参加も得て、源流フォーラムとの同時開催とすると共に源流観察会を通して源流への理解を一層深め、講師と参加者が自由に意見交換し、源流の明日と希望を語り合う。

●テーマ●
「源流再生・上下流連携と流域パートナーシップ」（仮称）
＝山（森）と川と海をつなぐ命のネットワーク＝

挨拶	廣瀬文夫　山梨県小菅村長
講演	高橋　裕　東京大学名誉教授
講師	長島　保　多摩川流域ネットワーク代表
	河村文夫　奥多摩町長・多摩川源流協議会長
	岩井國臣　参議院議員
	海野脩司　国土交通省京浜河川事務所長
コーディネーター	山道省三　全国水環境交流会代表
交流会	源流から河口まで各地で活動する市民による情報・経験交流会
源流観察会	丹波山・小菅・奥多摩の各地を巡る源流観察会
主催	多摩川流域懇談会・小菅村・全国源流ネットワーク
日時	12月11日(土)～12日(日)　午前10時30分　開会
場所	多摩川源流・山梨県小菅村中央公民館
参加費	無料（11日午前９時半にＪＲ奥多摩駅に送迎バス有り）
宿泊費	8,000円（１泊３食・初日の昼食は各自持参してください）
申込先	小菅村源流振興課　☎0428－87－0111